

# パトリア・モース博士の来日と エドワード・モース記念日米海洋 生物学研究者交流基金

大森 信  
阿嘉島臨海研究所所長

The visit of Dr. Patricia Morse to Japan and foundation of ES Morse Institute  
for exchange of Japanese and U.S. marine biologists

M. Omori  
E-mail: makomori@amsl.or.jp

大政奉還から10年後の1877年6月、ひとりの米国人が横浜港に到着した。ボードイン大学で動物学を教えていた39才のエドワード・モース(Edward Sylvester Morse, 1838-1925)である。ハーバード大学の著名な海洋動物学者ルイス・アガツシ教授の助手をしたことのあるモースは、古生代から干潟に棲む腕足動物(シャミセンガイなど)を研究対象にしていたので、来日のそもそもの動機は日本に多い腕足類の採集だった。来日して2日後、彼は文部省に採集の了解を求めるため横浜駅から新橋駅へ向かう汽車の窓から、貝塚を発見した。これが、後に、彼自身によって日本初の発掘調査が行われた大森貝塚である。貝塚から掘り出された先史時代の土器を、その表面の特徴的な模様から、モースは cord marked pottery としたが、これが日本語の「縄文式土器」となった。モースは江ノ島(神奈川県)の漁師小屋を研究室に改造し、若手の研究者や地元の漁師たちの協力を得て、腕足類の採集を8月末まで続けた。江ノ島の入江で初めてミドリシャミセンガイを採集した時の感動が、彼の日記に記されている。これが日本最初の臨海実験所の誕生であった。

彼は文部省から、発足間もない東京帝国大学の動物学・生理学の初代教授になるよう要請され、9月から講義を始めた。そして、ダーウインの進化論を初めて日本に紹介した。翌年4月、2度目の来日のときは採集のために函館周辺まで往復した。そして10月には



パトリア・モース博士と大森貝塚遺跡庭園(東京都品川区)内のエドワード・モース像

日本初の学会である「東京生物学会」(現在の「日本動物学会」)の発足に関わった。

大学での講義や研究の合間を縫って、モースは日本各地で多くの民芸品や陶器を収集している。3度目の来日(1882年6月)の目的は、彼が日本に招いたフェノロサ(Arnest Fenolosa)とビゲロー(William S. Bigelow)らとの関西・中国地方への日本美術の収集・見学の旅だった。昨年3-6月、東京国立博物館で催された「日本美術の至宝、ポストン美術館」は30万人を超える観覧者を集めたが、展示品の多くが、フ

---

エノロサとビゲローのコレクションであった。モースは後年、日本で集めた自身の蒐集品を全てボストン美術館とピーボディ博物館に譲渡している。このように、明治初期におけるモースの日本への貢献は自然科学だけでなく、美術や民俗学の世界でもきわめて大きいものであった。

モースは当時の日本人の生活や礼儀を高く評価して米国に伝えた。日本紹介の著作には Japan Day by Day(日本その日その日、石川欣一訳、平凡社)や Japanese Homes and Their Surroundings(日本のすまい・内と外、上田 篤ほか訳、鹿島出版会)などがある。また、晩年、関東大震災の報に接して、遺言書を書き換えて、蔵書 12000 冊を東大図書館に遺贈した。それらの書籍は「モース文庫」の蔵書票がつけられて今日も保存されている。

エドワード・モースの祖先にあたるアンソニー・モースが妻のアンや息子のアンソニーらと共にイングランドから清教徒として新大陸に上陸したのは 1635 年であった。彼から 8 代目がエドワードである。アンソニーは米国に来てからメアリー・エリザベスと再婚して、息子のベンジャミンが生まれた。そのベンジャミンから 9 代目に当たり、米国のノースイースタン大学で長く海洋生物学を教えていたパトリシア・モース博士 (Patricia Morse、現在は同大学名誉教授) が一昨年 9 月初めて来日された。モースの家系は米国のいろいろな分野で活躍しているが、エドワード以後、動物学者はパトリシアさんまで出ていない。彼女の専門は渚の砂や泥の中に住む間隙生物、ことに貝類、の生物学である。昭和天皇が 1978 年に米国東海岸のウッズホール海洋研究所を訪問された時、パトリシアさんは名門から出た研究者として、天皇をご案内した。

そんなパトリシアさんが 9 月 27 日に来日してから 8 日間の短い滞在の間、前半は星 元起さん(元日本

動物学会会長)が、後半は私がホスト役をして、エドワード・モースにゆかりのある東大図書館や総合資料館、大森貝塚遺跡庭園、東大三崎臨海実験所、新江ノ島水族館、江ノ島の臨海実験所跡地などを案内した。また、鎌倉や京都の観光も楽しんでもらった。

パトリシアさんは日本でのエドワード・モースの業績に対する高い評価に感銘を受けたようで、帰国してから、エドワードと日本とのつながりを再認識して、ES モース記念基金(ES Morse Institute)を創設し、日本と米国の海洋生物学者の交流に役立てたいと申し出られた。そして話し合いの結果、米国側は日本の研究者がよく訪れるワシントン大学フライデーハーバー実験所 (Friday Harbor Laboratories; ノーベル賞の下村 脩博士が 1962 年の夏頃、オワンクラゲを採集していたところ)、日本側は阿嘉島臨海研究所と東大三崎臨海実験所および筑波大下田臨海実験センター、名大菅島臨海実験所が交流計画に参加することになった。

2012 年 6 月 24 日、ワシントン州サンファン島の美しい岬にあるパトリシア・モース博士宅で基金の創設式があった。米国側はモース博士をはじめ、フライデーハーバー実験所のセーベンス所長ほか大勢が参加し、日本側からは私と星氏と関係者数名が出席した。そして、一回目の基金受賞者(日本側は北大 3 名、東大 1 名、名大 2 名)に賞状が贈られた。因みにセーベンス博士(K.P. Sebens)は大西洋の造礁サンゴの栄養摂取やさんご礁動物プランクトンについての研究を長年続けている人である。この交流基金の創設によって、阿嘉島臨海研究所と米国の研究者との交流とサンゴの研究がますます盛んになることを希望している。